阿弥陀仏の光明による治癒

壬生 泰紀（龍谷大学）

これまで阿弥陀仏の光明については、阿弥陀仏の起源や原語の解明、またかの仏の徳性の理解といった観点から考察がなされてきた。その際、検討されるのは光明無量としての阿弥陀仏であり、かの仏の光明の具体的なはたらきについての考察は少なく、とりわけ光明による治癒というはたらきについては、ほとんど注目されてこなかった。『大阿弥陀経』『平等覚経』といった古い翻訳の無量寿経の終盤に位置する、娑婆世界に阿弥陀仏やその世界が顕現する、いわゆる「霊山現土」の場面で、かの仏の光明によって身心の障がいが治癒されることが説かれる。しかし、それ以降の『無量寿経』やサンスクリット本などでは「霊山現土」の場面はあるものの、光明による治癒については削除されるのである。

さて、梶山雄一氏は神変の思想史を描き出すことを試みた一連の論考を公表している（「神変」『梶山雄一著作集』第3巻所収；「神変としての浄土教」『梶山雄一著作集』第6巻所収）。それらは大乗仏教の救済論の一端を明らかにするものであり、大乗仏教研究において重要な成果といえる。そのなかで『大阿弥陀経』における阿弥陀仏の光明と名号の内容を「大乗仏教の神変の最古の原型」と見なすのである。またその後の展開として、大乗仏典に見られる種々の神変の思想を取り上げ、特に大品般若経や華厳経が説く神変による段階的衆生救済に注目する。その段階には、神変による病気や身心の障がいの治癒も含まれている。そして、大乗仏典の神変について検討した上で、梶山氏は無量寿経の考察に戻り、『無量寿経』で光明による身心の障がいの治癒が削除され、代わりに信ある者と信なき者の往生を説く胎生・化生の一段（いわゆる「胎化得失」）が置かれた背景に大品般若経の神変の影響があることを示唆する。さらに、かかる改編は「神変における衆生の段階的救済の浄土的変容である」と指摘する。

梶山氏の以上の指摘は、阿弥陀仏の救済を神変の思想史上に位置づけようとする意欲的かつ示唆に富むものである。ただ、無量寿経の発展において、光明による治癒が削除され、胎生・化生が置かれた背景については再検討が必要である。そもそも『大阿弥陀経』の「霊山現土」の場面には疑念を取り除く目的があり、信疑と関わる「胎化得失」と同様の問題意識を有している。つまり、初期から後期にかけての以上の改編は、他経典による外的要因というよりも、無量寿経自体の内在的な要因が大きいと考えられる。この点を踏まえると、梶山氏が主張する「神変における衆生の段階的救済の浄土的変容」については修正・見直しが必要であろう。

そこで本発表では、まず『大阿弥陀経』に見られる阿弥陀仏の光明による救済の構造を確認する。次に、その救済の構造が他の大乗仏典の神変とも共通点を持つことを紹介する。それを踏まえ、無量寿経の初期から後期にかけての発展において、「霊山現土」の場面で光明による治癒が削除され、それに続いて「胎化得失」が説かれるようになった要因や思想的意義を検討する。最後に、無量寿経における神変の思想の浄土教的変容を明らかにしたい。

キーワード：無量寿経、神変、胎化得失